# ハテノウタ 新聞

2017年2月23日発行　週刊　毎週木曜日発行
http://www.c-mono.com/hatenouta/

発行
第2号
2頁建

2017年2月23日〔木曜日〕

発行所　有限会社キューカンバー
京都市東山区蒔田町549-3 藤ビル2F
〒605-0942
TEL075-525-2195
MONO　発行人　MONO新聞部
【無料】


記者懇談会・前編

## 創作の契機から、詳細な内容まで!!
## 『ハテノウタ』の魅力と挑戦

いよいよ来週から、MONO『ハテノウタ』の公演が始まります。上演に先がけて、記者懇談会の様子を特集。詳細な設定、隠れたテーマ、創作の過程など、語られてこなかったエピソードを2回にわたってお伝えします。

**―創作のきっかけは？**

**土田**　元々は知り合いの映画監督と「お婆ちゃんと若いイケメンの恋とか、そういうのをやりたいですね」という話をしていて、その時に監督から若返りの薬が実際に研究されていることを教えていただいたんです。マウスに投与したら老化を止めるだけじゃなくて、むしろ若返ったとか。

そういう薬があったとしたら、飲んでいる人は100歳になっても見た目が若くて、飲んでいない人は普通に年を取っている。そんな2人が同い年で、同級生みたいに話していたら面白いなと思いまして、その案を今回の作品に使わせていただきました。

**―作品について**

**土田**　この作品では、若さを保てる薬がすごく一般化しているということになっています。薬は高額なので、飲む頻度はさまざま。その頻度の差によって、見た目の年齢がバラバラ……という設定です。

見た目の年齢がバラバラな同級生たちが、100歳を迎える前に同窓会を開いて、「なつかしいね」「若いね」とか言いあったり、そういう、同窓会でよく見る景色から始まります（笑）。

もうひとつの趣向として、歌があります。この同窓会がカラオケボックスのような歌を歌える場所で行われているということになっています。僕、以前はミュージカルが大嫌いだったんですが、ロンドンに留学して『ボンベイ・ドリームス』を観てからハマってしまって。6回も観に行って、マグカップを買ってしまったぐらい好き（笑）。それから色んなミュージカルを観るようになったんですけど……自分では出来ないんですよね。自分の本拠地であるMONOのメンバーは踊れないし、歌えないので（笑）。やりたいけどできないなって、ずっと残念に思っていたんですが、あるとき「カラオケボックスの設定だったらできる！」って思いついて。芝居と歌詞が偶然リンクしたり、歌によってちょっと感動的なシーンができたりすれば、ミュージカルにはならなくても「エセ音楽劇」みたいなものは作れるかもしれないと。今回はMONOなりの音楽劇を作ってみようと思っています。

みどころは、この設定といつものアンサンブルに注力した会話、それに今回は歌がプラスされるということになります（笑）。

**―タイトルについて**

**土田**　『ハテノウタ』と言うんですけれども、これは人生の涯ての歌ということです。劇中で歌われる曲は井上太郎さんという方にオリジナルで作っていただいています。登場人物たちが高校時代に流行った曲を歌っているという設定で、雰囲気としてはモーニング娘。が流行ってた時代のイメージです。なんでしたっけ「フワッ！フワッ！」みたいな（笑）。周りの人が合いの手を入れるようにできている曲ってあるじゃないですか。そういう重点を置いていて、笑ってしみじみというオーソドックスなお芝居。明るく楽しいMONOです（笑）」と上演当時の土田英生は語っている。現在につながるMONOのエポックメイキングな作品をこの機会に。配信は2月23日（木）21時から「観劇三昧」(http://kan-geki.com/）にて。

## MONOの代表作『約三十の嘘』「観劇三昧」で無料配信を開始!!

『約三十の嘘』は2004年に大谷健太郎監督、椎名桔平、中谷美紀、妻夫木聡等の出演で映画化もされたMONOの代表作。オリジナルの舞台を観ることができるまたとない機会だ。

1996年初演の本作は、久々にチームを組んだ詐欺師たちが思いがけないハプニングで疑心暗鬼に陥り、それぞれの思惑が浮き彫りになっていくという物語。舞台は仕事のために北海道に向かい、その三か月後に仕事から帰る、道中の寝台列車の中だけで展開される。列車の中で話される会話によってチームの過去や仕事の結果が見えてくるという仕組みだ。

「この作品は〈笑い〉に

## 有題無題

「別れる男に、花の名を一つは教えておきなさい。花は毎年必ず咲きます。」小説家の川端康成が残した言葉だ。別れた男が毎年、自分を思い出すようにということなのだろう。春は出会いの季節であり、そしてまた別れの季節でもある。思い出すことが多いとしたら、やはり出会いより別れのほうか。小生にとっても春が来るたびに、思い出されることはひとつやふたつではない。卒業式に第二ボタンを記念にもらうなどといったほほえましい決まり事も昔はあったが、もはや制服はブレザーのほうが多いと聞く。今の高校生たちはどんな決まり事を行っているのか。大学生のように、袴からドレスへ、謝恩会へといった慌ただしい行事がなければ、卒業証書を持ったままカラオケルームに入り、大勢でにぎやかに別れを惜しむという高校生も少なくないのかもしれない。今の高校生たちはどんな歌を歌っているのか。歌は花に似ている。忘れたころにふと耳にする。その歌の名前を教えてくれる人は誰だろう。（水沼健）

う曲が流れたら面白いんじゃないかなと。そういったイメージを発端に、いろんなタイプの曲を作っていただきました。

**―作品のテーマは？**

**土田**　いつもそうなんですが、あまり強いテーマはないんです。ただ最近、なんていうんですか……グローバリズムの揺り戻しみたいなものを感じます。全体的にはすごく管理されているんだけど、なんだか違和感を感じてしまう。まあこの辺りのことは、自分がいつも考えていることなので、作品を書く上でも避けて通れなくて、今回も少しベースに置いています。こういう世界になったときこの国はどうするのか……とか、考えちゃいますね。でも基本的には楽しい話にしたいなと思っています。

**―キャストについて**

**土田**　MONOメンバーが5人。全員40代です。あと、最近MONOの舞台によく出演してくれている20代の女優さん3人。これまでご一緒した俳優さんはやっぱり僕が目指していることをすぐに理解してくれるので、本当にやりやすいですね。そして浦嶋りんこさんです。浦嶋さんは久保田利伸さんやDREAMS COME TRUEのバックヴォーカルをやっていらっしゃったり、先日も「天使にラブ・ソングを」に出演されていましたけど、その他にも沢山のミュージカルに出演されている方。歌があるお芝居ということで、本当に歌が上手い方にもご出演いただきたいと思いまして浦嶋さんにお願いしました。その9人がみんな同じ年齢で同級生という設定です。

**―歌は何曲ぐらいあるんですか？**

**土田**　5曲の予定です。女の子のアイドルグループの曲と、高校の謝恩会で男子が歌ったということになっている曲。MONOの5人も歌います。稽古をしている今はなんとも笑えない景色ですけども（笑）。その他、浦嶋さんに歌っていただく曲があったり、よくわからない演歌があったりします。

**―歌詞は土田さんが書かれてるんですか？**

**土田**　書いてるんですけど……作詞家の方はすごいなと思いました。音に歌詞をはめようと思ってもはまらないんです。文字を減らすと意味が通らなくなるし。一度作った歌詞を稽古場で劇団員に見せたら「土田さんの芝居みたいに全部の情景がしっかり見えるね」って言われました。誉め言葉かなと思ったんですが（笑）。彼は、もうちょっとバラバラというか、イメージを繋げたような言葉でも歌の意味は通るんじゃないかってことが言いたかったようです。

ただこの芝居では歌詞はそんなに目立たないと言いますか、カラオケボックスで目にする風景で芝居を作ろうと思ってますので、歌詞はその中のひとつの要素、という感じです。

**―ミュージカルみたいにガンガン歌ったりする？**

**土田**　歌いたいんですけど（笑）、ガンガンは歌ないですね。MONOの芝居は客席を向いて喋ることがほとんどないんですが、歌も同じ。舞台上のみんなを見て歌っています。歌を朗々と聞かせるってことはないです。ただ、浦嶋さんに歌ってもらう曲についてははちょっと考え中です。気を抜くと浦嶋さんの歌唱力に頼りすぎてしまいそうになる（笑）。

全体としては芝居の中で歌を見せていきたいなと思っています。

**―青春群像劇になるのでしょうか？**

**土田**　見かけが若い人が沢山いますし、高校時代の話をするので、ちょっと甘酸っぱい感じにしたいなと。ただ、単純に懐かしがるノスタルジーだけの芝居にはしたくない。観ている人が、高校生を見ているような気分になったり老人を見ているような気分になったり……郷愁と現実がないまぜになるような芝居にしたいですね。

**―若返りの薬は全員が飲んでるんですか？**

**土田**　基本的にはそうですね。

2年前に『ぶた草の庭』という芝居を作った時に、薬で難病を治すという設定で、自分なりに色々と調べて、考えた内容を検証していただこうとご紹介いただいた大学の先生にメールを送ったんです。「こういうことってあり得ますよね？」って。「嘘の話です。もちろん虚構ですけど、ないとも言い切れない話ですよね？」そう送ったら、「化学的にはあり得ません」というお返事をすぐ様いただきまして。「もしあったとしたらノーベル賞ものです。」って（笑）。それで自信を喪失してしまった経験があるので、今回は薬の部分に関してはほとんど調べない状態で書いています。

**―歌が入っていることで、いつもの流れとちょっと違うなって感じるところはありますか？**

**土田**　やる前は違うかなと思っていたんですけれど、やってみると、ほとんど変わらないですね。むしろ登場人物がみんなで集まって会話しているので、作風が若返ったというか、本当に〈アンサンブル〉っていう感じの会話劇になってるような気がしますね。あ、でも音楽が入るところは新鮮です。自分がやっている芝居では、芝居中に音楽が鳴ることがあまりないので。

**―出演者のみなさんは制服を着られるんですか？**

**土田**　そう思いますか？僕もそう思いました！そういうのも面白いかなと今も思っているんですけど、痛々しくなったらツラいなって（笑）。

『相対的浮世絵』っていう作品を2004年に上演したんですが、それは高校時代の仲間がいて、ある裏切りがあって2人が死んでしまった。その死んだ人たちが幽霊になって出て来て……というお芝居でした。そのときに制服を来て集まるっていうシーンがあったんですが、それと同じになるのはまずいのか……とか。考え中です。

（後半へ続く）

『ハテノウタ』稽古場にて（撮影：東直子）

MONO『ハテノウタ』は3月3日より大阪ABCホールを皮切りに北九州芸術劇場小劇場（3月11日・12日）、四日市市文化会館第一ホール（3月18日・19日）、東京芸術劇場シアターウエスト（3月24日～29日）で上演される。料金は会場にて異なる。問合せ・キューカンバー075（525）2195。